

### 第3回 邑南町小中学校の在り方検討委員会会議録（要旨）

1. 日 時 令和7年10月3日(金) 16:30～18:00
2. 場 所 邑南町健康センター元気館 会議室
3. 出席委員 松本委員長、山下委員、山中委員、武田委員、土田委員  
(松本委員長・山中委員はWEBでの参加)
4. 事務局 原課長、甲山補佐、松浦係長、野田

#### [開会]

1. 学びのまち総務課長あいさつ

#### 2. 議題

- (1) 邑南町の小中学校の在り方について

##### ①第2回検討委員会の振り返り

#### 事務局から資料の説明

- ◇ 前回の会議で、学校で学ぶふるさと教育の時間は限りがあるので、公民館などで引き継いだものがあるかという意見があったので、何点か資料を準備した。

#### 資料1

- ・学校から引き継いで公民館などで行うふるさと教育の広報や新聞記事

#### 資料2

- ・羽須美中学校の取り組み。(英語版羽須美地域の観光パンフレット作成)  
地域コーディネーター(=学校の依頼に応じて地域の指導者を調整したり、ふるさと教育等のサポートを実施する)との連携

#### 資料3

- ・布施公民館だより  
地域学校(ぜにほう学校)での活動  
親子料理教室・座禅体験・工作教室

#### 資料4

- ・出羽公民館だより  
地域学校(出羽わんぱく学校)での活動  
野菜苗の植え付け、種まき体験・味噌づくり・恵方巻づくり

#### 資料5

- ・日貫公民館だより  
地域学校での活動  
そばの種まき、そば刈り、そば打ち体験

- ◇ 地域の課題について住民が集まって話をしたことはあるかとの意見があったの

で用意した資料。

#### 資料6

- ・それぞれの地域が行っている地区別戦略の取り組み概要をまとめたもの

◇ 大人のふるさと教育の具体的な取り組み例はどういったものがあるかとの意見により、一例として用意した資料。

#### 資料7

- ・阿須那公民館での歴史講座「地域の歴史を学ぼう」案内チラシ  
令和3年からシリーズ化、大体年に2回ずつぐらい講座を開催し、地域の歴史を学んでいる。

◇ 今までに地域からの要望活動はないかという意見をいただいた。

邑南町教育委員会が自然環境を生かすなど、特色ある教育を推進している 小学校を「小規模特別認定校」に指定し、一定の条件を付して通学区域外から就学を認めることにより、児童の心身の健康増進と豊かな人間性を培うこと、また学校の活性化を図ることを目的に実施方法を策定した。

その後令和2年1月1日、日貫小学校が小規模特別認定校になっている。

令和3年には、日貫小学校の小規模特別認定校制度の実施に向け、校区外からの通学しやすい環境整備を進め、児童保護者に寄り添った支援策の充実に向けた要綱の見直しや通学バス運行計画の検討についての要望書が、日貫地区の自治協議会から提出され、教育委員会で見直しを行ったということがあった。

松本委員長：

- ・ 前回の委員会では用意された資料により、学校現場の特徴的な教育、独自の教育活動を参照した。  
併せて、公民館での活動もたくさんあるため、それぞれの公民館、それぞれの地区の特徴的な取り組みを共有した。

#### 【第1回目、第2回目の委員会の重要な観点の振り返り】

- ・ 当委員会では、子どもたちの立場、子どもたちの成長を中心に、再編ありきではなく、どういう学びの在り方がいいのか、子どもたちがどういう学び、どういう姿で成長していくのかがいいのか取りまとめて報告する。
- ・ この委員会ともう1つ、邑南ラボ共同研究が、地域の目線で調査しているので、当委員会の意見と邑南ラボ共同研究の調査結果を町長、教育長が判断して、今後の施策に生かされる。
- ・ 現在、邑南町には小中学校が11校ある。この学校の再編について、今日の第3回の委員会では、私たちが意見を交わして、委員会全体の方向性をまとめていく入口になるのではないかと考えている。
- ・ 子どもたちの未来や成長のことを考える上で、地域の人々の意見や思いを聞かずに、私たちの意見はないということで、アンケートを取り、まとめてもらった。

## ②アンケート結果について

松本委員長：【アンケート結果を見ながら、内容の振り返り】  
【第1回・第2回検討委員会のキーワードの説明】

松本委員長：

- ・ 今日、ある一定の方向性を私たちが共有できたらいいと思うので、保護者や地域の方の意見を見て、感想も含め自由に意見をいただきたい。

土田委員：

- ・ アンケート結果を見た感想は、私が思った以上に学校の再編や在り方などは、子ども主体で、子どものために考えた方がいいという視点の意見が多いということだった。
- ・ 地域に学校が無くなるのは困るというのはもちろんあると思うが、そこに通う子は少ないかもしれないけれど、いろいろなやり方があるのではないかとすることで、そこに期待する言葉があった。人数だけを考えるのではなく、大人数が苦手な子が通えるように小規模校も残し、選択できるようにするといった意見もあった。  
そのあたりも柔軟に対応できるのが、邑南町のこのサイズ感、邑南町らしさなのかと思った。
- ・ 住民の皆さんが、割と柔軟に考えてくださっていた。私も子どもたちに即したことをこの邑南町のサイズ感、人数だからできることについて丁寧に検討してしていきたいと思っていたので、皆さんのニーズとあっているのかもしれないとアンケート結果を見て思った。

松本委員長：

- ・ 私も土田委員が言われたこととほぼ同じような気持ちを持っている。  
初回に私が少し委員の皆さんにお話したことがあるが、小さな世界では非常に手だてができるというケースがある。一方で少人数クラスの中に苦手な子ができたときには、その子とずっと一緒にいなくてはならず、学校に行けなくなったということもあるので、これはケースバイケースで、様々なケースを想定して手だてをしていくといいのではないかなと思う。
- ・ やはり今、文部科学省が言っている、主体的で対話的な学びとは、様々な指導と多様な人との関わりということがキーワードだと私も感じた。

武田委員：

- ・ 率直な感想としては、今の教育に対して好意的な意見が想像以上に多かったと思っている。学びの本質という意味では、邑南町の教育はそんなに間違っていないだろうと思う。
- ・ 印象としては、人との出会いの中でいろいろな気づきを得たという自由記述が多かったので、人との出会いの場をたくさんコーディネートできるような教育を目指すべきなのは、大筋で確定だと思う。
- ・ アンケートの少し細かい部分だと少数意見がやはり気になる。学校の再編についてまだ議論をするべきでないとか、遠方になるのが不安だと思っている方が、どこの地域でどの年代なのかがもう少し必要な気がする。この意見を全体

の数にまとめると少数意見だと流されそうな気がする。再編の議論を本当にしたくない、この議論を進めること自体が不安だと思っている方がおられるのだとしたら、「それはそうじゃない」という意見が出せるのか、それとももう少し何か考慮すべきところがあるのかということが気になった。これはもう少し分析して、丁寧に進めていく必要がある。

松本委員長：

- ・ 武田委員の意見のとおり、今回のアンケート結果を見ると、現状の教育には大体満足しているけれど、再編の話し合いを始めることについて「必要だと思う」「やむを得ないと思う」という意見が大半で、保護者の気持ちとしては教育には満足しているけれど、将来を思うと再編の話し合いを進めていかなければいけないと思っているということがわかる。その中で少数意見がどの地区から出ているのかということは大切なことだと思う。  
これは具体的で細かな話だが、地区ごとの思いに温度差があるのかないのかを知った上で、私たちの意見をまとめるべきで、課題だと思った。

山中委員：

- ・ 保護者の皆さんは、我が子のことなので切実な課題だと思うが、地域の方たちが、非常に学校のこと、子どもたちのことを一生懸命考えてアンケートに回答しているという思いが伝わった。私の経験上、邑南町は非常に住民の意識が高く、よく学んでおられて、その現れなんだろうと思いながら、アンケート結果を見せてもらった。
- ・ 小規模校になった時の対話的な学びや人と関わる力が心配だといった意見も目にしたが、小規模校は小規模校で、全校で子どもたちが活動し、少人数なので動きやすいため、校外活動が非常に活発に行われている。そうすると同級生のみならず、下級生、上級生、地域の方との対話の機会がふんだんにあり、小さい子にはどう関わったらいいのか、どんな言葉で話しかけたら適切なのかや、上の人にはどういうものの言い方がいいのかなど、対話をしながら学んでいるということも一方でいえるのではないだろうか。つまり小規模校だからといって対外的な学びができにくい、できないということにはならないのではないかと感じた。
- ・ もちろん同級生は少ないので、教室の中での対話に限界があるのは否めないが、単に小規模校だからできない、対外的な学びの機会が少ないということは、複式学級の学校の様子などを見ても、個人的にはあまり感じないと思っている。

松本委員長：

- ・ 今日授業を見に行った松江市の小学校の校長が、出雲市で4つの小学校が統合された旅伏小学校の元の学校の内の1つで最後の校長を務めた方だった。今、山中委員が言われたような小規模校の話をされて、閉校式が非常に盛り上がった、小規模校だからこそできることが非常に多く、地域が一体だったと話された。
- ・ ただ、同じ学年の子どもがいない、2学年続けて子どもがいないという、子どもがいないのに学校があるような状態になったのでしょーうがなくなったというよ

うなことを話されていた。

- ・ いろいろな要素があるけれど、子どもたちがいる状態がずっと続くのであればいいが、ある学年がなくなったりすると厳しいと感じたところだ。

山下委員：

- ・ 先週は羽須美中学校、今週は日貫小学校の授業研究に行ってきた。生徒数も児童数も少ない授業だが、どちらの学校も大きな、深みのある授業を行っていて、私の目から見れば、人数的に心配することはないのではないかと思った。
- ・ 児童生徒数が少ないから、学力的にもいろいろな問題が生じるのではないかと思うのかもしれないが、現状を見たところ、彼らは深い学びをしながら、その時々必要とされる学業を行っているのではないかと思う。

松本委員長：

- ・ 実は3日前にフィンランドとドイツから帰ってきた。フィンランドやドイツの教育は、非常に最先端で、邑南町と同じところは自然が豊かなところだ。子どもたちが伸び伸びしていて、非常に自然と関わり合って教育をしていると思った。  
フィンランドの中でも、統合というのはやはり押し寄せていて、この国でもそういうことがあるんだと思って帰ってきたところだ。
- ・ この委員会の大事なことは、やはり子どもたちの学びだと思っているが、私たちだけでは難しいところがあるので、今回のアンケートは、私たちの意思決定の大きなキーの1つを成すものだと思っている。
- ・ アンケート結果が出て、今日意見を交わしながらどういう方向性があるのか、現状がいいのか、再編したほうがいいのかということをもう少し深く考えて、次の委員会に進みたいと思っている。
- ・ アンケートの結果で、地区ごとに思いの温度差があるのではないかと思うので、事務局には地区ごとの分析をしてもらい、再編という話がある中で、どういう形がいいのか、私たちの判断の参考にしたいと思う。
- ・ さらに先ほど言い忘れたこと、他の委員の話を聞いて思ったことなど、自由に話していただければと思っている。

土田委員：

- ・ 保護者の方たちは、「子どもの学び」で大切な要素として、やはりコミュニケーション能力や社会のルール、マナーの習得を求められ、それはどうやって高めるのか気になるところではある。
- ・ 地域について学ぶふるさと教育は、42名が大切な要素だと回答された。ふるさと教育は、地域で学ぶというのと、地域と繋がって学ぶというのは、何となく違うのではないかと、分けて考えたほうがいいのではないかと思った。
- ・ ふるさとの地域のことを題材にして学ぶというのは大事だと思っており、それがやはり地元を愛するということに繋がっていく。自分たちが住んでいた所はどういう所かということを知らないといけない、知っていた方が愛着も高まると思う。ただ、保護者や学校の人たちだけの固定した枠だけで、子どもたちの考えがずっと同じような中で繰り返されるのではなく、普段関わらない幅広い

人と関わるというところが、地域の方に入ってもらって学ぶふるさと教育という視点で、すごく大事になってくると思う。

- ・ やはりコミュニケーションが、子どもたちの思考の枠を広げ、ふるさと教育をやる上でとても大事だと思うところを、もう少し色を出していてもいいのではないか。ふるさとのことを学ぶというのでなくても、いろいろな人と関わる場面を作り、コミュニケーションを学ぶためにやっているというねらいを、取り組む側も明確にして関わっていくことを、今一度確認したほうがいいのではないかと感じた。

松本委員長：

- ・ 今、土田委員が言われたことは非常に大事なことだと思う。  
知識や社会を切り開く能力を身につけて、邑南町を支える子どもを育てなければいけないが、その子が日本や世界を相手に闘う人にもなって欲しい。日本を支える人というのは、東京からだけ生まれるものではなく、この邑南町からも生まれて欲しい。そこが難しい。
- ・ ディベートをするとき、多様な意見や多様な人と関わることを考えたときには、確かに人数が少ない中では難しいと思う。同じ学年で同じ成長過程の子どもたちが2つのグループに分かれて議論を交わす、そういう機会は人数が少ないとできにくいと感じたところだった。

武田委員：

- ・ 先ほどの土田委員の話を聞きながら、とてもよくわかると思ったのは、ふるさと教育と地域のおじちゃんおばちゃんと出会って心が動くというのは別だということ。必ずしも地域の知識的なものを伝えることよりも、近所のおじちゃんおばちゃんにこんな人がいるんだと知ることの方が子どもに与えるインパクトが大きいような気がして、そのチャンスさえあればいいような気がしている。
- ・ 先日、地元のイベントで大きな神楽大会があり、20代ぐらいの男の子に「わかりますか」と話しかけられた。彼はずっと昔に少し関わった子で、その日は彼女を連れて歩いていたようだった。「今広島で働いています」、「邑南町に帰っておいでよ」という会話をしたぐらいだったが、それでいいような気がしている。大人になって、ちゃんと働いて、彼女がいて、邑南町の行事には帰ってくる。邑南町が目指すのは多分、世界を変える大谷翔平ではなく、ただ彼らが邑南町のこういう人を知っているということや、たまに帰ってきて、誰かが声をかけてくれたら嬉しいと思うこと、それぐらいでいいような気がしている。
- ・ 私が少し不思議に思っているのは、学力だけは平均を出して競う。しかしこれは、足の速さとそう変わらないような気がしていて、足が速い子は放っておいても早い。勉強ができる子も放っておいてもできる。できる子はできるし、できない子はできないで、勉強ができない子ができるようになったら良い人生を歩めるのかと言ったら、別にそういうことではないような気がしている。
- ・ 特に最近AIが発達してきているので、学力の高い低いというのが、人生の幸福度に与える影響はおそらくこれから下がってくると思う。それよりもコミュニケーションや、人と仲良く過ごせることの方が重要度が上がってくる社会になるのもほぼ間違いないと思う。

- ・ そのタイミングでせっかく再編の議論をするのなら、思い切った舵の切り方を保護者としてはしたい気がしている。おそらくこのアンケートでも年齢を 40 歳未満と 40 歳以上で分けると結果が変わると思う。下の年代は、勉強をものすごくさせるよりももっと楽しく生きて欲しい、そんなに無理して都会に行ったり、いい大学に入るより、もっと幸せに生きてもらう方が重要だと思ってる人が増えるような気がするので、思い切った将来を願っている人が若い世代には多いのかどうか、事務局にはいろいろな切り方で分析してみしてほしい。
- ・ あともう 1 つ、最近読んで面白かった本が、安宅和人さんが書かれた『「風の谷」という希望』で、地域がこれから数年かけて成り立たなくなる、どう考えてもインフラがもたない、その上でどうやって生き延びるのかということや、小さくまとまってそこで完結できるシステムをいかに作るのかということが、最先端の研究者を集めて書かれていた。
- ・ この本に書かれていたことは、邑南町の教育でおそらくできるのではないかと私は思っている。今回のアンケート結果を見ても、関わってあげようという大人がいて、子どもたちも神楽を見に行って、大人になってまた帰ってくるという流れがすでにできている。そうするとあまり無理をしなくても、今の流れというのはみんな満足しているし、うまく継続できるアイデアさえあれば、悪くないのではないかと思っている。再編することが不安に思っている方にも、今までを大きく変える怖い未来ではなく、今までのいいところを続けていけば邑南町は大丈夫というような方針が出せれば一番いいと思っている。

松本委員長：

- ・ 武田委員が言われた幸福について、私はフィンランドから帰ってきたばかりなので、あの国のことを少し簡単に言うと、退職をしても貯蓄ゼロ、でもみんな生きていける。残業はほぼゼロ、4 時に終わって帰る。だから大人に余裕があり、子どももそんな大人を見ている。
- ・ 学力というのは知識があると切り開いていけるので、教育の世界ではベースだが、何が幸福なのかという点では、日本とフィンランドは全然違っていて、有用感や生きていることの喜びといったことは、日本人に比べてフィンランドの人の方がはるかに高い。有用感や生きていることの喜びは、邑南町からも発信できるのではないかと考えた。

山中委員：

- ・ 土田委員と武田委員からふるさと教育の話が出て、私が主管課で担当だったので少し気になっていたのだが、よくふるさと教育では地域の「ひと・もの・こと」について学んでいくということを言っていた。つまり、「ひと」について学ぶということも、人と関わりながらその人と一緒に学ぶということも、ふるさと教育で十分に想定した学びの題材だと私は理解している。「もの」についても、「こと」についても、そのことを詳しく知る人に話を聞いたり、実際に体験して人と関わるということは本当に大事なこと。「もの」や「こと」でなく、「ひと」との関わりが重要というところは、お 2 人が言われたとおりではないかと思うし、最初からそのことも大きなねらいであったということもお伝えしておかなければいけないと思った。

- ・ ふるさと教育のステップとしてよく一般的に言われるのが、「i n・ a b o u t・ f o r・ w i t h（イン・アバウト・フォー・ウィズ）」という言葉。例えば「イン」というのは、保育所や小学校低学年のころに、近くに綺麗な川があるなら、そこで川遊びをしてふるさとにどっぷりつかると。そのイメージが「イン」。「アバウト」は、何かふるさとの人について学ぶ。「フォー」は、ふるさとのために何かを学ぶ、あるいは学んだことを実践する。「ウィズ」というのは、地域の人とともに、ふるさとを守る活動などを実践、活動していくということ。  
そういったことをイメージして、長いスパンで取り組んでいただきたいをお願いしてきたなと思い出していた。
- ・ 以前お話ししたが、どういった学びがあったのかというその成果の一端を、元気館に集まって発表する場として「おおなんドリーム」が設けられていて、私も2回ぐらい見てきた。それに参加していた子どもたちが今は成人しているのではないと思うが、ふるさとについてどんな思いを持っているのか聞いてみたい感じがする。
- ・ これはふるさと教育の1つの検証ということにもなるかもしれないが、どこの市町村もやって欲しいと思う。実際取り組んだことはどうだったのか、それをノートにしてまた振り返り、今後のあり方を探るようなことも必要ではないかと思っていた。
- ・ 私の教え子のひとりが今、小学校で教頭をしていて、小規模校で複式学級のある学校の教頭を務めた後、町で1つに統合した小学校の教頭を経験している。そこで両方経験してみてどうかということ聞いてみた。  
統合した学校で一番大変なのはスクールバスの調整だと言っていた。低学年を早く帰さないといけない、中学年や高学年でも早く帰ることがあったり、部活で残る子と残らない子がいるなど、その調整だけでパンクしそうだとも話していた。
- ・ これが小規模校だとそんな心配は何もいらぬ。安心安全のために下校途中までついていくなど、柔軟な対応で済むけれど、統合した学校ではそういうわけにはいかない。そういった大変さみたいなところはなかなか見えないが、学校の負担、ストレスというのは、なかなか大きいものがあると話を聞いたところだった。

#### 山下委員：

- ・ 約40年と邑南町との付き合いは長くなった。その間子どもたちを見てきて、将来自分はこういう道を歩んでいきたいという希望が盛り上がってくると、放っておいても学力というのはついてくる、高まっていくのではないかという感想を持っている。
- ・ 自分はこれがしたい、将来伸ばしたいという希望を育てることが、彼らの学力や人格を育てていくきっかけにもなるのではないか。そういった点では、我々大人が子どもたちにとって希望を持てるような地域にしていく、子どもたちを支えていくことが、うまく育っていくための必須条件なのではないかということ、長く関わっている中で強く思っている。



松本委員長：

- ・ 子どもたちにとって一体何が大事なのか。学力もちろん、生き中での有感や山下委員が言われたような「ここでこういうことがしたい」といった、ふるさとやいろいろな人、もののために将来輝きたいという想いだけは子どもたちに与えていきたいという感想を持った。
- ・ 今日が3回目の委員会。これまでの委員5人の意見を踏まえ、次の第4回は、ある一定の答えを出す議論にそろそろ踏み入らないといけないと思っている。
- ・ 何か今日話しておきたいことや、その他何か議題にしておいたほうがいいと思う委員がおられたら、発言していただきたい。

武田委員：

- ・ どうしても議論が再編するか再編しないかという二択になるのが、やはりずっと気になっている。その他の選択肢はないのかというのを常に思っており、もしそういう事例があったら聞いてみたい。私のイメージだと、再編はもういたし方ないところはあると思うので、拠点はどうするかというのもあると思う。邑南町は公民館がたくさんある強さがある。各地に社会教育ができる場所があって、例えばそこに行きたいときには行くといった、小さく分散させるような教育モデルが、日本や世界にあれば聞いてみたいと思っていた。

松本委員長：

- ・ 今のところ公民館は拠点の1つ。ただ、今武田委員が言われたように本拠地は構えるけれど、人と関わるのが苦手な子がいたとしたら、例えば公民館で、その後は通信というような道もあるのかもしれない。
- ・ 再編かそうでないかということを町長から求められていると思うので、一定の答えを出す必要はあると思う。その上でするにしましにしましでも、こういう教育の方法があるということもあわせて示せるのではないかと考えている。
- ・ 次回の委員会で、ある一定の選択、どちらかということも必要だが、方法論についてもそれ以外にこういう方法があるということがあれば、発言していただけたらと思っている。

山中委員：

- ・ アンケートで学校の形態、新しい形についてどうかというような、具体的には小中一貫や義務教育学校といったところを尋ねる問いがあった。  
それについては、非常に肯定的な意見が多かったような印象を受けた。  
小中学校の再編に付随して、9年間を見通した教育のような新しい視点を入れて検討していくことも必要なのかもしれないと感じた。
- ・ これは実際にあることだが、例えば学校を新設するというような話になると、単独で建てるだけでなく、公民館や図書館を併設することによって、地域住民のコミュニティの拠点になって、子どもたちもそこにやってくる。地域の人との関わりが非常に容易にできることもあるので、そういう学校があったらいいと思っていた。

松本委員長：

- ・ 私の方からも、旅伏小学校など先進的な事例から、統合してよかったところ、子どもたちの学びの上で良かったところ、逆にしんどいところなどをヒアリングして皆さんに報告しようと思っている。
- ・ 4回目に向けて、もう一度委員の方には、今日の意見も参考に、それにとらわれることなく、アンケート結果を見て、さらに自身の意見を固めるなど、試行錯誤をしていただきたいと思う。
- ・ それぞれの皆さんのいろいろな思いを感じることができたのが今日の3回目だった。次回もしっかりと議論して、ある程度の方向性を固めていきたいと思っている。

[閉会]